

## 諏訪と武田家

戦国時代の甲斐武田家と信濃の諏訪大社は、軍事的な征服と深い宗教的崇敬という二面性を持つ密接な関係にあった。武田信玄(晴信)は、諏訪大社の祭神である建御名方神たけみなかたのかみを「戦神」として篤く信仰した。武田信玄は諏訪神号旗すわしんごうき(軍旗)を掲げて戦場に赴き、諏訪法性兜すわほっしょうのかぶとを愛用していたとされる。武田家は軍事力で諏訪地方を支配下に置く一方、血縁関係を通じてその統治の正当性を強めた。天文11年(1542)、信玄は諏訪大社の大祝(最高神職)を代々務める諏訪頼重を滅ぼし諏訪郡を領国化した。頼重の娘の諏訪御料人は、信玄の側室となり、武田勝頼を産んだ。勝頼は当初「諏訪勝頼」を名乗り、諏訪氏の名跡を継ぐ立場にあった。更に、武田家は諏訪大社の神事や社殿の造営に深く介入し、地域支配の安定を図ったと云われている。信玄は遺骸を諏訪湖に沈める様に遺言を残していた。

### 【信玄の遺言(甲陽軍鑑品第卅九)】

「それがしとぶらひは無用にして、諏訪の海へ具足をきせて、今より三年前の亥の四月十三日に沈め候へ」

### 【信玄の死後 実際にどうしたか(甲陽軍鑑品第卅九)】

「おの／＼御遺言のごとく仕候へども、家老衆談合のうへ、諏訪のうみへ、しづめ申す事ばかり不レ仕」

この点について、田中義成は「甲陽軍鑑考」の中で『「甲陽軍鑑」には武田信玄の遺体を諏訪湖に沈めたと書いてある。しかし信玄の墓は甲斐の恵林寺にある。』と史料を読み間違え、偽書説を提唱したと云われている。

(川端紅葉著 20261・1・26)



「諏訪湖」 ©2017.8 川端紅葉